

「よつぼし」の種子発芽率向上と播種育苗技術

試験研究計画名：種子繁殖型イチゴ品種「よつぼし」の全国展開に向けた省力栽培体系とICTによる生産者ネットワークの確立

地域戦略名：種子繁殖型イチゴの省力栽培体系と生産者ネットワークの確立による新しいイチゴ経営の展開

研究代表機関名：三重県農業研究所

地域の競争力強化に向けた技術開発のねらい

種子繁殖型品種の誕生によって種苗生産の分業化が進むことは、イチゴの産業界全体に大きな経済的価値を生み出します。しかし、個々の生産者は、元々は自己の労力で得ていた種苗を購入することになり、種苗コストが増します。そのため、生産者の種苗コストを下げる選択肢として、生産者が播種から行う栽培体系を開発しました。

開発技術の特性と効果：

5月上旬に、9cmポリポットに入れた培土の表面に種子50粒を散播し、覆土はしません。底面吸水等で培土の表面が乾かないよう管理すると、2～3週間程度で発芽率90%以上になります。なお、気温25℃以上に保つことができると発芽揃いが早くなります。そのまま一次育苗し、セル苗よりも根量が少ないので、セル苗より7～10日程度早い6月末から7月始め頃に、1株ずつポットに鉢上げして二次育苗に移行します。以後は、二次育苗体系として管理し栽培します（写真1、表1）。



写真1. 種子を散播し二次育苗体系用の苗に育てる方法

上左：種子50粒 上中：9cmポリポットに播種 上右：発芽した実生
下左：鉢上げ前の苗 下右：1株ずつ二次育苗用ポットに鉢上げ

表 1. 種子を散播し鉢上げして二次育苗体系に移行する栽培体系作型図

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
				播種	育苗	鉢上	育苗				
収穫								定植		収穫

開発技術の経済性:

セル苗（406 穴）単価 60 円に対し種子の単価は 35 円で、播種から始めることで種苗費は 42%削減になります。必要になる追加物品は、ポリポット、培土、底面吸水トレイと排水用不織布で、10a 当たり 150 ポット、トレイ 5 枚以内で、経費 1 万円を越えることはありません。毎日見回って水補給することが望ましいのですが、さほど労力を要するものではありません。また、トレイを並べる台と雨よけ条件が必要になりますが、小面積でよく、既存のハウスや軒先等を利用できます。

こんな経営、こんな地域におすすめ:

雨よけ条件で、水滴の跳ね返りが少ないベンチ上で管理できることが必須条件になります。しかし、小面積で管理でき、労力や技術もさほど必要としません。発芽には温度が必要ですが、播種時期に当たる 5 月の日最高気温が 20℃程度以上の地域であれば、広い範囲の生産者が取り組むことができます。

技術導入にあたっての留意点:

発芽間もない幼苗は、炭疽病に感染しやすく、雨よけ条件のベンチ上で管理する必要があります。注意深く観察し、発病株が見られたポットは速やかに廃棄してください。

研究担当機関名:

三重県農業研究所、岩手県農業研究センター、富山県農林水産総合技術センター園芸研究所、山口県農林総合技術センター、香川県農業試験場、三好アグリテック（株）、（研）農研機構九州沖縄農業研究センター、（NPO）東海地域生物系先端技術研究会

お問い合わせは:（一社）種子繁殖型イチゴ研究会

電話 050-3754-5376（平日 9:00~17:00） E-mail ichigo01@seedstrawberry.com

執筆分担（三重県農業研究所 森利樹）